

おこもりで、古い伝承を見直す 後藤新平(5)

作家 童門冬二

神話は古代生活者の話

“おこもりぐらし”が定着してから、私たちの生き方に、ひとつの生活慣習が生れた。日本人が日本を見直すというならわしだ。自分の国よりも外国の文化に魅かれることの多かった人びと（特に若い人）が、日本国内のお寺やお宮に詣で、住職や神官から伝わる伝承を素直に聴く光景をTVが伝える。

その光景はあきらかに、

「神や仏も超人的な存在ではなく、すぐれた生活者であった。そのチエや生きざまには学ぶべきことも多い」

ということを示している。

私自身はこのいわば「歴史のみかた・考え方」を、小学生時代に歴史の教師によって植えつけられた。テキストは「スサノウミコトのオロチ退治」だ。教師のこの神話に対する解釈はつぎのようなものだった。

- ・八つも頭を持つような大蛇（オロチ）はこの世に存在しない
- ・あれは“根の国（島根県）”に多い“たたら”を使う8人の鉄の生産者のことをいう
- ・斐伊（ひい）川の上流で砂鉄を拾い、フルイにかけて、粒のこまかい砂鉄はフルイの目にかからず洩れて下流に流れていく
- ・これが川下で堆積し下流に住む農民を苦しめる。洪水の原因になるからだ

・苦しむ農民はスサノオを鉄の生産者のもとに派遣し、注意させる

・スサノオに注意された鉄の生産者は、はじめてこのことを知り、謝罪して「今後は気をつける」と誓う。そしてみやげに自分たちのつくった剣を贈る（この剣が天皇の3種の神器のひとつであるアメノムラクモのツルギになる）

「こうしてこの争いも解決した。神話もけっして絵空ごとではなく、われわれの先人たちの生活者としての物語なのだ」

この説明は私の胸に深くきざまれ、いまの私の「小説作法」の根幹になっている。

愛知県名の由来と信長

明治維新後「廃藩置県」がおこなわれ、60数か所あった国（くに）と、2百数十あった藩（大名家）は合併統合されて県になった。県名に古来の伝承が活用された所もある。

たとえば「愛知（あいち）県」だ。県は旧尾張（おわり）の国と三河（みかわ）の国が合併して成立した。由来は尾張の国に伝わってきた“あゆち伝説”によるという。

“あゆち伝説”というのは、

- ・その季節になると尾張に西方から“あえの風”とよばれる風が吹いてきて上陸する
- ・この風は尾張地方に幸福をもたらし、特に多くの住民の生業である漁業に、ゆたかな収穫をも

たらず。

私はこの伝承を政治にとりいれ、自分の事業の経営理念として据えたのが織田信長だ、と措定した。つまり信長の“天下事業”は、自分の生れ土地に伝わる伝承を、尾張だけが専有するのではなく、天下（日本国）のあらゆる地域で共有しようと企てたのだ。

この計画にはブレンがいた。沢彦（たくげん）という僧である。おそらく禅僧だと思う。というのは信長の宗教心があったとしても現世に深い関心があり、来世のことにはあまり関心がなかったように思えるからだ。

死ぬ前に安土（あづち）のまちづくりをキリスト教風にしたが、これはヨーロッパ文化を導入するための企てだと思う。そのための実験都市だったのではなからうか。

そして地名を安土（あづち）としたのも含みがある。以前、歴史学者さんたちが、

「安土のイミは何だろう？」

という検討会をひらいたことがある。いろいろと意見が出たが、結局は、

「平安楽土の略ではないのか」

ということになった。TVで放映されたものだったが、私はうれしかった。というのは私はひそかに、信長の、

「あづちはあゆちを意識している」

と思いきんでいたからである。

飛躍したいいかたをすれば、

「信長はあゆちの風を尾張が独占するのではなく、天下（日本国）の隅々まで吹かせようとした」と思うからだ。

尾張に生れ、育ったかれは当然幼ない時から“あゆちの伝承”を知っていた。しかしそれを政治に生かし、自身の天下事業に発展させる意欲はまだない。

そうさせたのが沢彦である。

信長の父信秀は、身分はそれほどではなかった

が、地域ではかなりの実力者だったので、死んだ時の会葬者は多かった。僧もかなりきた。その中に沢彦もいた。

この日、信長は長男なのに狩りに出た。その帰りに葬儀場に現われ、香をつかんで父の位牌に投げつけた。出席者は呆れ、たわけ！うつけ！と嘲笑した。しかし沢彦だけは、

「いや、天下人になる」と予言したという。

信長は自分に諫死した平手政秀のために一寺を建て、沢彦に開山住持を頼んだ。沢彦は承知した。そして信長をこの国の天下人にすべく、古代中国の名王といわれた「周の武王」の日本版をめざさせる。

周の武王は孔子や孟子をはじめ多くの思想家を感嘆させた名王である。古代中国でも“春秋時代”といわれ、政治家や思想家が賞賛する理想の時代であった。何よりも民が鼓腹撃壤していた。

沢彦は、

「この国の武王におなり下さい。それには尾張に伝わるあゆちの伝承を実現することです」と進路を示した。信長は忠実に沢彦の意見に従った。

・政庁の所在地を武王の拠点“岐山”にあやかり“岐阜”とした

・公文書に押す印判をつくり、「天下布武」と刻んだ。天下に武政を布く^し解されているが、私は「天下に武王の政治を布く」と解している

・誰でも売買のできる自由市場（楽市楽座）を設け、そのための交通を便にし、関所や船番所のすべてを破壊した。

今までも僧が大名のブレンになる例は数多くある。しかし助言は主として“気持の持ち方”であって、こまかい生活に及んだのは沢彦がはじめてではなからうか。

しかし大名への助言者も徳川家康が天下人になると「学者」に替り、僧は一斎に交代して行く。国民の質を変えるためだ。PRが盛んになる。後藤新平はその現代版だった。